

No	提 案 名	提案団体名		
		代表者氏名	所 属	
2	宇都宮の魅力めぐり 一歩きたくなるまち宇都宮その 2ー	宇都宮共和大学 都市・アメニティ研究会		
		堀川 真実	宇都宮共和大学 シティライフ学部	
			指導教官 氏 名	山島 哲夫

1 提案の要旨

昨年、私たちは、宇都宮の中心市街地を安全かつ楽しく歩くための方策を検討し、「歩きたくなるまち - 宇都宮 - を目指して」というテーマで提案を行った。その中で、中心市街地の問題点を明らかにし、歩きやすくする工夫、楽しく歩くための工夫、釜川を活用したマルシェ計画等の施策を提示した。しかし、前回の提案では、歩きたくなる前提＝歩いて楽しめる宇都宮の魅力、については中心的な課題として取り上げていなかった。

宇都宮は、市外や県外の人にも広く知られた魅力という点で、他の都市に比べて見劣りがする、と言われており、宇都宮に観光を目的に訪れる客も多くない。餃子・ジャズ・カクテル・自転車などを通じて魅力の発信が行われているが、まち自体の魅力については、大谷石の建物の存在以外に知られていないのが実情である。

都市・アメニティ研究会では、宇都宮を実際に歩いてまちのあり方を検討してきたが、その中で、宇都宮のまちなかにも郊外にも、まだ発見されていないあるいは対外的に知られていない魅力があることを確認してきた。しかし、こうした魅力は相互に連携が取れておらず、それを周知する試みも十分には行われていない。

そこで、今回の提案では、ほかの都市とも比較しつつ、魅力を発見し、それをどのように周知していくかという観点から、宇都宮の魅力めぐりの提案を行うこととした。

2 提案の目標

宇都宮のさまざまな魅力を探し出し、それらの魅力を散策路としてパッケージ化して提示し、宇都宮市全体の活性化を図ることが本提案の目標である。

宇都宮には二荒山神社、城址公園、大谷の資料館、田川・釜川など数多くの魅力が存在している。しかし、残念ながら、単独の観光資源として観光客を誘致するほどの力は有していない。しかも、宇都宮市民が気軽に散策している姿も多いとは言えない。

宇都宮の魅力を高めるためには、まちの至る所に様々な魅力がある「魅力満載のまち」にする必要がある。まちの魅力は、外から発見される場合も多いが、単に観光客を対象にするのではなく、宇都宮の市民が魅力を感じて楽しく歩けるまちとすることがより重要であると考ええる。

そこで、本提案では、宇都宮の至る所に存在している魅力を、市民の目線から「散策路 100 選」としてまとめ上げ、「歩けば 愉快だ 宇都宮」を実現するために、市民の楽しめる路として広く PR することを目指した。市民が楽しめる散策路は、市外から訪れる人々をも楽しませることができると思われる。

3 現状の分析と課題

1. 歩かない宇都宮市民

宇都宮市は一人当たりガソリン使用量が全国 1 位（2011 年は、東日本大震災の影響があり全国 2 位）であり、クルマに強く依存する生活を送っている。中心市街地の通行量も減少傾向にあり、郊外のショッピングセンターが主要な商業拠点となりつつある。まちを楽しく散策する、まち中で買い物をするという行動はすでに過去のものになっている。

まちは、本来、人の集まる場所であり、人が楽しむハレの場であり、人々が様々な目的をもって（あるいは特に目的がなくても）歩いている場所であった。宇都宮の市民からは、まちは歩いて楽しむ場所であるという意識が失われているように感じられる。

まちを歩かなくなったのは、歩きたくなる工夫や魅力がないためであり、歩いて楽しめる場所を具体的に提示し PR していけば、宇都宮市民も歩くようになると思われる。

2. 歩くことを前提にしたまち

「まちは歩いて楽しむところである」と述べたが、多くのまちや観光地では、まち自体を歩いて楽しんでもらうことを前提にまちづくりが行われている。多くの人が訪れる人気のあるまちには、まちを楽しく歩いてもらうための様々な工夫が凝らされている。

以下、歩くということを前提に、先進都市の事例を確認する。

1) 鎌倉

鎌倉は、国宝である円覚寺舍利殿や鎌倉大仏をはじめ歴史的な遺産が数多く残存しており、また、おびただしい数の由緒ある寺院が存在している。さらに、歴史文化都市としての景観確保に市民と行政の一体となった努力が行われている。

市内にある様々な施設をつなぐ散策モデルコースを多数用意し、訪れる人の目的や興味、季節に応じてコースを選択できるようにしている。多数のコースがあることで、繰り返し訪れることも可能である。

＜ホームページ上にあるモデルコースの例＞

- ① もののふの都の静寂を歩く（鶴岡八幡宮から瑞泉寺へ）
- ② 里の信仰と清流を訪ねる（杉本寺から朝夷奈切通しへ）
- ③ 閑静な寺とご利益巡り（寿福寺から佐助稲荷へ）
- ④ 禅の古刹と花を訪ねて（円覚寺から建長寺へ）

など、目的に応じたコースが用意されている。

鎌倉は、観光都市であり、飲食、買い物、体験等様々なメニューが用意されているが、その中に、市内の散策コースの提示があり、まちを歩いて楽しめるように工夫が行われている。

2) 横浜

横浜も歴史的な遺産が多く残されており、観光客が多数訪れるまちである。特に、山下公園、赤レンガ倉庫群、MM21 地区、中華街、馬車道などのある港の周辺地域は、近代の由緒ある建物が残るとともに現代的な建物が存在し、ゆっくり散策でき、かつ、食事・

喫茶、様々なアートなども楽しめる空間となっている。

これらの地域は、すべて鉄道の駅から歩ける距離にあり、かつ、それぞれを歩きながら巡ることも可能になっている。歩いて楽しむためのマップなどの情報も豊富に用意されている。

3) 神戸

神戸市も横浜市と同様、港であり旧居留地であったこともあり、多くの歴史的な建物が存在している。また、市街地が横に長く、海から背後の山までの幅が狭く、市街地から容易に自然にアプローチすることができる。

海岸沿い、北野地区、六甲地区、港地区、須磨地区、灘の酒蔵地区など神戸市の主要な地区ごとに詳細なまち歩きマップが作られており、マップを片手に多くの観光客がまちを楽しみながら歩いている。



神戸市北野地区

4) 大阪

大阪市は、まちの魅力を探るために、市内に 300 ものまち歩きのコースを作り上げている。「大阪あそ歩 (ぼ)」というプロジェクトである。2008 年秋にスタートし、徐々にコースを増やしている。コースごとに下図 (大阪あそ歩ホームページより転載) のマップを作成しており、ガイドがついてまちの詳しい説明を受けながらまち歩きをしている。



大阪のまち歩きは、まちをじっくり観察し、まちの由来なども探りながら行われている、まちの学習活動でもある。

5) 長崎

長崎市は、横浜や神戸と同じ歴史的な都市であり、多くの観光客を集めている。この長崎で行われたのが、「長崎さるく博」という博覧会 (2006 年実施) である。これは、日本で初めてのまち歩き博覧会として、非常に有名になったイベントで、長崎市内中に歩

いて楽しむコースを設け、博覧会期間中ガイドがついてまち歩きをするというものである。大阪あそ歩は、この長崎のイベントを仕掛けたプロデューサーが大阪で仕掛けたプロジェクトである。

長崎さるく博でも、数多くのコースが設定され、現在でも「長崎を歩こう長崎さるく」として活発に活動が継続している。

6) 益子

益子は、益子焼のまちとして多くの観光客が訪れているまちである。益子のまちは比較的小さく、市街地がまとまっているため、歩いてまち中を巡ることが可能である。そこで、「益子をさんぽ」と題したわかりやすいマップが作られている。益子を歩くことにより、益子の魅力を理解してもらおうという姿勢が感じられる。



3. 他都市の事例から

2.で見た他都市の事例から以下の共通点を見出すことができる。

- ◇ 歩いて楽しめる工夫が凝らされている
- ◇ 分かりやすいマップが作成されている
- ◇ PR をしっかりと行っている

○歩いて楽しめる工夫

2 で取り上げた都市は、市内に存在している資源を積極的に取り上げ、それを地域の魅力として楽しめるようにしている。これは、地域に多くの資源があるまちだから可能になったという面もあるが、たとえば、大阪や長崎では、地域の歴史（由来）を探ることで、地域に存在している資源をより魅力あるものに作り上げていく試みが行われている。

宇都宮には魅力ある資源が少ないと考えられているが、取り上げ方次第では、魅力を高めることもできるし、歩きながらそうした魅力を発見できるようにする工夫も必要である。

○分かりやすいマップ

いずれの都市も、実際にまちを歩く人の立場に立った美しくかつまち歩きの際に係蹄できるマップが用意されている。まちを歩いてもらうためには、そのためのマップが整備されていることが重要である。

○OPRについて

いずれの都市も、ウェブサイトや観光案内所でその都市の歩いて楽しむ方法がわかりや

すく示されている。

この写真は、鎌倉駅にある観光案内所の写真である。駅の改札口のそばにあり、常時2人の案内人が様々な人の問い合わせに応じている。観光案内所には、わかりやすいマップのほかにも観光情報が用意されていた。



それに対して、宇都宮駅にある宇都宮の観光案内所は、提供している観光情報もあまり多いようには見えない。宇都宮駅以外にも案内所を設けたり、提供する情報を増やすなど、より積極的にPRする姿勢が重要と考えられる。

4. 宇都宮の代表的な散策コース

宇都宮は、まち中はおおむね平坦で、田川、釜川という素晴らしい河川が流れ、市街地の周囲には緑豊かな山や丘が存在している。散策を楽しむのにふさわしい都市と考えられる。現に他のまちに誇れる散策コースは存在している。いくつか例を挙げる。

○大谷

大谷は大谷石の産地で文化庁の文化的景観の調査対象にもなった地域である。地域内には大谷石資料館、平和観音、大谷観音、景観公園をはじめとした地域資源があり、市外からも多数の人々が訪れている。乗合バスによりアプローチもできバス停から大谷の資料館までの道は、周囲の景観もよく素晴らしい散策路になっている。また、大谷では、8月中旬に「大谷石夢あかり」と題するイベントが、今年9月にはフェスタ in 大谷 2012が開催されるなど様々な試みも行われている。こうした短期間のイベントに加え、大谷の魅力を日常的に楽しめる仕掛けも必要と思われる。



○釜川

釜川は、市内の中心部を流れる二層式の一級河川である。釜川は、多くの緑に覆われ、川沿いの遊歩道も整備され、水辺に直接近づける工夫も行われており、中心市街地の素晴らしい散策路である。宇都宮市も釜川の整備改善に努力しており、市民の団体も釜川の整備に力を入れている。



しかし、依然として、釜川は散策路として定着しておらず、裏通りというイメージにとどまっている。また、釜川散策のためのマップ等の整備も十分に行われていない。

○ろまんちっく村

ろまんちっく村は、宇都宮市の北部にある道の駅で 46ha の滞在体験型の農場公園である。体験農場、森の散策、温泉やプールに宿泊施設まで設けられている。栽培された食材を基にしたレストランもあり、春夏秋冬様々な楽しみができるよう工夫している。多くの機能があり、散策路としても素晴らしいが、ろまんちっく村は、宇都宮の中心地からかなり離れたところにあり、この地を目指して出かける必要がある。市民が日常気軽に散策を楽しむためには、身近な場所に数多くの散策路を作り出す必要があると考える。



○文化の森

文化の森は、宇都宮美術館周辺の公園施設で、宇都宮郊外の緑豊かな丘陵地にある。約 26ha の広大な土地に、大きな芝生広場と森の中の散策路が整備されている。また、美術館行きのバス便があり、クルマに頼らなくてもこの場所を楽しむこと、市内に比較的近いことなど、宇都宮を代表する散策場所の一つといえる。



以上示したように、宇都宮は郊外にも中心市街地にも魅力的な散策場所は存在している。しかし、これらの散策に適した場所は、それぞれ別に存在しており、歩いて楽しむというコンセプトのもと「歩きたくなるまちの散策路」として、全体的な位置づけは行われていない。

宇都宮には、魅力的な散策路となりうる場所は数多く存在している。それを具体的に、散策路として提示していくことが必要であると考え。これまで、まちの様々な魅力を探し出し、それに形をつけて発信していこうという意識が十分ではなかったと思われる。

まちの資源は、取り上げ方次第でより魅力的なものになる。宇都宮の魅力を探し出し、つなげ合わせ、まちじゅう魅力満載の宇都宮を実現するために、具体的な施策事業を提案する。

4 施策事業の提案

宇都宮を歩きたくなる魅力満載のまちにするためには、まちじゅうに魅力ある散策路をつくり出し、それを市民も来訪者も気軽に楽しめるようにする必要があると考える。そのため、以下の4つの具体的な方策を提案する。

- 1) 『うつのみや散策路 100 選』を作る
- 2) 散策路の魅力を高める
- 3) 散策路の周知を図る
- 4) 散策路の魅力を維持向上させる

1. うつのみや散策路 100 選の作成

宇都宮のまちを楽しく歩ける散策路を「うつのみや散策路 100 選」として提示する。宇都宮には、既に「うつのみや百景」が選定されており、宇都宮の魅力を発信するツールとなっている。しかし、この百景はあまり知名度が高くなく、歩きながら見るように作られていないだけでなく、実際に巡って歩くためのコースが示されていないという問題がある。

そこで、新たに「うつのみや散策路 100 選」を作成し、広く提示することで、市内の人はもちろん市外からくる来訪者にとっても、興味がわき、宇都宮を実際に歩いてみたくなると考える。

散策路は、普段歩いている市民が魅力的と思われる路を提案して、それを一定に基準に基づいて評価し、選定するという手続きを取るものとしたい。

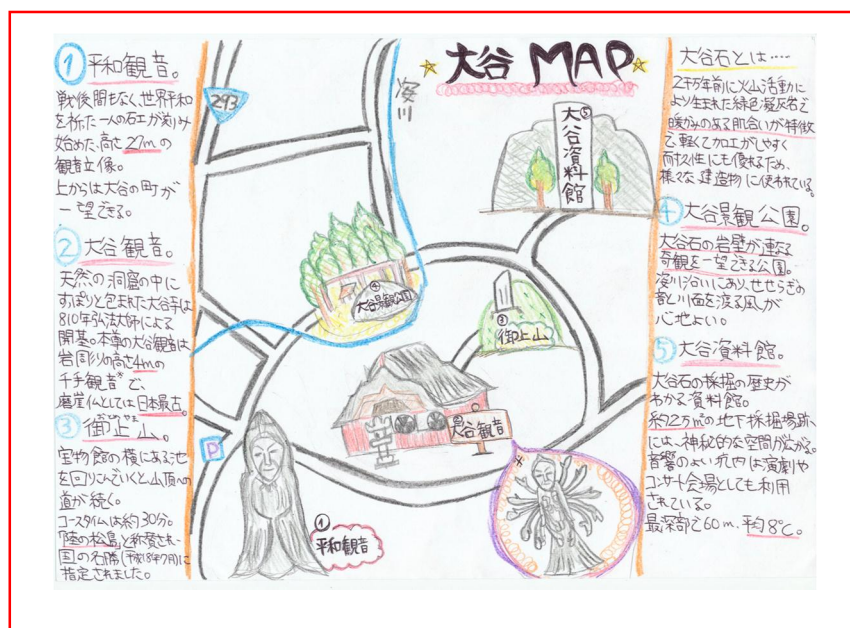
散策路は、季節、地域、歩く人の属性（年齢、性別、体力）により様々なタイプが考えられる。1 日コース、半日コース、1 時間コースなど散策時間により編成することも可能である。また、「歩く」というだけでなく、ジョギングなどのコースとして活用することも検討に値する。

散策路の作り方の例を示す。



前頁の図は、平石地区の散策路の例である。NPO 法人（トチギ環境未来基地）が作成したもので、散策路の整備や雑木林の伐採整備まで行っている。

右に載せた例は、様々な魅力がある大谷地区について、歩くということを目的に手作りのマップを作成してみたものである。



2. 散策路の魅力を高める

散策路の魅力を高めるには、様々な工夫を加えることが不可欠であり、イベントや昔からの伝統行事などとの組み合わせについても考える必要がある。

大谷では、様々なイベントを行っており、散策路の魅力向上に努めている。ろまんちっく村では、園内の産物の活用をはじめ様々な活動が可能になる工夫も凝らされている。

散策路は、そこを歩くだけでなく、大阪あそ歩や長崎さるくのように地域の資源を探索しながら地域の由来や歴史を学べるようにすることで魅力を高めることができる。また、散策路周辺の草花や新緑、紅葉等の四季折々の自然を組み込んだりすることも、散策路の魅力を高める有効な手立てである。季節ごとにお勧めのコースを設定することが可能となる。

釜川は、春には様々な花が咲き快適な水辺空間をつくり出している。昨年提案した釜川マルシェ計画のように食との組み合わせにより、見て楽しく食べて楽しい魅力的な散策コースとなりうると思われる。

宇都宮は、果物の生産量が意外と多く、観光農園も多い。特に、梨、リンゴ、イチゴは品質も良く有名である。リンゴは篠井地区で、梨は清原や城山地区で多く栽培されているが、まち中にも梨園は存在している。観光農園や果物の直売所などをコースの中に取り込むことは、散策路自体の魅力を高めることにつながる。リンゴやナシ、イチゴは比較的収穫時期が長いので、その期間は果物を中心とした楽しみ方を提示することができる。

散策路 100 選で選定された散策路を相互に連携させグルーピング化し、数多くの楽しみ方ができるルートを設定することも、散策路の魅力を高めることにつながる。この場合、宇都宮の魅力的な景色を集めた「うつのみや百景」などを積極的に散策路に取り込んでいくべきである。

散策路を単独のものとして捉えるのではなく、できる限りの工夫を凝らしてその魅力を高めていくべきである。

3. 周知を図る

うつのみや散策路 100 選は、市民や来訪者に周知されて初めて意味がある。周知を図るためには、うつのみや百景のようにパンフレットを作成するとともに、それぞれの散策路ごとのマップを作り、どこでも入手できるようにする必要がある。市役所や観光協会のホームページ上でダウンロード可能とすることが必要である。散策路のコース上に 100 選の統一的な案内板を設置し、案内板にはコースの全体像と所要時間やコース上の魅力等を簡単に示す。さらに、案内板には QR コード等をつけて、詳細なデータを読み取れるようにすることが効果的と考える。もちろん、うつのみや百景についても、統一したデザインの案内板の設置や QR コード等の設置が必要である。

季節ごと、地域ごと、あるいは歩く人の体力に応じて、散策路の組み合わせを作り、スタンプラリーを行うことや、散策路の人気投票を行って毎年のベストの路を選定することなども考えられる。より多くの人に散策路の存在を知ってもらい、楽しんでもらえるようにすることが大切である。

4. 散策路の維持向上

一度作られた散策路は、そのまま、維持していくのではなく、常に新しい内容を取り込む必要がある。マップの情報もアップトゥデートにしていくことが大切である。散策路は、多くの人が歩くことにより、今まで知られていなかった新たな発見がありうる。たとえば、道端に珍しい草花が咲いていることの発見や地域の云われの発見などといったことから、景観の楽しみ方の発見など散策者の意見を反映できるシステムを作る必要がある。

さらに、地域の住民を中心に散策路の美化に努めていくことも必要になる。公園などでは、周辺利用住民が維持管理に積極的に参画しているが、散策路周辺の住民が散策路の美化にかかわりやすい仕組みを考える必要がある。一つの散策路に国道、県道、市道など管理主体が異なる道が含まれることはありうるし、また、河川の区域や公園など管理の方法が異なる場所も含まれる。こうしたものを一体的に管理することは難しいことであるが、住民の協力を得ながら、散策路として統一的な管理が行われることが期待される。

5. 散策路 100 選の選定について

本提案の中心である「うつのみや散策路 100 選」の選定の仕方を検討する。散策路 100 選は、市民の目線で市民自らが作り出すものである。市民の目線で作るといっても、散策路として満足すべき基準が必要になる。そこで、試みに、散策路の選定基準を設定する。この基準は、現段階のものであり、実際の選定にあたっては、さらに議論を詰めていく必要があるのはもちろんである。

＜散策路の選定基準（例）＞

1) コースの目標設定がはっきりしているか

のんびり歩く、ジョギングする、町並みを楽しむ、自然の風景を楽しむ、果物狩りをする、などそのコースの特徴がはっきりと伝えられているか

2) コースは安全か

自転車、自動車などによる危険性がないか
歩行者の歩く路面がきちんと維持されているか
防犯上の危険はないか
など

3) 快適に歩けるか

夏場の場合厳しい日差しを避けることができるか
大通りなどで大量の交通がないか、渋滞などがないか
など

4) 適切なところに休憩場所などがあるか

ベンチ、喫茶店や飲食の場所などの休める場所があるか
トイレなどが近くにあるか
など

5) さまざまな魅力との連携が取れているか

宇都宮の産物、うつのみや百景、イベント、伝統行事などの魅力を取り入れているか
他のコースとの連携が取れているか
など

6) コースまでのアクセスが容易か

コースまでのアクセスは、公共交通機関等で可能であるか

< 散策路の選定方法 >

散策路 100 選は、幅広い市民の参加により選定すべきである。選定基準を示し、市民からのアンケート等を取り、各地区の代表を含む市民が参加したに会議で案を作り、市民の投票等で選定することが、選定後の周知にも有効と考えられる。

選定された 100 選は、3 年ないし 5 年ごとに見直し、常に改訂していくことも、市民参加の機会を増やすことから有効である。

5 まとめ

今回の提案は、歩きたくなるまち - 宇都宮 - を実現するために、歩きたくなる場所を作る必要がある、ということから行ったものである。宇都宮以外の多くの都市で、歩くことを前提としたまちづくりが行われている。宇都宮にも歩いて楽しめる多くの魅力があると考えられる。まちじゅうに魅力満載の散策路を作り出すことにより、「歩けば 愉快だ 宇都宮」の実現が図れると考える。